あすなろ

令和４年１２月２１日
中津川市立川上小学校
学校だより　　１２月号

１１月３０日「感謝の会・学習発表会」
多くの方のご参会をありがとうございました！

校　長　　中山　英三

ご来賓と保護者を合わせ、当日は１００人近い参観者に恵まれました。子どもたちは、多くの視線と拍手の中で、これまでの学びを発表する機会を得ました。コロナ禍で会を縮小せざるを得なかった昨年度を思えば、これがいかに幸せなことかと、しみじみ感じます。

発表を終えた後、子どもたちは口々に「緊張した」「やばかった」などと感想を述べていました。その後に「声、小さくなかったやら？」と聞くのは、発表にそれなりの自信や満足感を残せたからでしょう。子どもたちがそれぞれに緊張し、その緊張とそれぞれに向き合い戦うことのできた会となりました。

ご参会いただいた方からは、多くのコメントをお寄せいただきました。好意的で温かなコメントばかりで･･･読んでいて、思わずジンとしてしまいました（年をとると涙腺が緩むのは本当ですね。まあ、さすがにボロボロと泣いたわけではありませんが･･･)。そのうちの二つを、下に紹介させていただきます。

感謝の会では、学校行事等を通して地域の方々に支えられている様子が動画を通して伝わってきました。子どもたちからのメッセージも愛があふれるステキな内容でした。学習発表会も、手話に総合学習に、伝統である「篠笛」も、児童みんな、たくさん練習したんだなと。とてもよい発表会が見えました。ありがとうございました。

皆さんお疲れ様です。どの発表も一生懸命練習したこと、学習したことが伝わってきました。そして、保護者として、地域の多くの方々に見守られながら育っていることに改めて感謝したいと思います。幸せな子どもたちです。ありがとうございました。

さて、学習発表会では各学年とも“全員が発表”にこだわりました。話すことの得意な代表だけが話すのではなく、あくまでも全員で。しかも、マイクは使用しませんでした。普段“大勢の前”にあまり慣れていない子どもたちにとって、大勢の方々が集まってくださる学習発表会は絶好の「学びの場」でもあったわけです。もっとも“全員が発表”だなんて、本校が少人数だからこそできることです。その意味においては、少人数は本校の“強み”です。寄せられた感想の中に「一人一人が主役という言葉がピッタリの発表会でした」というものがありました。それは、常日頃から私どもが意識し、目指している学校像に他なりません。大変に素敵なお言葉をいただき、素直に嬉しく思いました。

あらためまして、地域および保護者の皆様の多数のご来場に感謝申し上げます。お世話になった方々に感謝の気持ちを伝えるための会でしたが、逆に、地域・保護者の皆様からの温かなまなざしとお心遣いを再確認させていただいた気分です。

３学期にはスケート学習が始まります。そして、６年生は卒業、他学年は進級に向けての教育活動を進めてまいります。今後とも、相変わることのないご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

１２月の学校生活アンケート集計結果

評 価 項 目	児童	保護者
楽しい学校生活	3.4	3.1
授業の分かりやすさ	3.2	3.1
授業で意見を発表	3.1	
家庭学習	3.0	2.6
家や学校で読書	2.8	2.5
進んであいさつ	3.2	2.9
進んで掃除	3.4	
仲間と仲よく	3.6	3.3
安全に気をつけて生活	3.3	3.4
自分にはよいところがある	3.3	
先生がよさを認めたり相談にのったり	3.5	3.4

左は、１２月に実施した「学校生活アンケート」の集計結果です。児童は学校で、保護者の皆様にはご家庭で回答いただきました。ご協力をありがとうございました。

さて、左の結果につきまして、全体で見ればそれほど低い評価ではないのでしょうが、中には、児童や保護者から「１」や「２」のつけられた項目もあります。いただいた評価は謙虚に受け止め、今後の指導に生かしていきたいと考えています。

※児童、保護者とも４段階評価です。
４＝よくあてはまる　　３＝あてはまる
２＝あまりあてはまらない　１＝全くあてはまらない

12/1 防災講座

防災士の原一博さんをお招きし、主に「土砂災害・水害」に関わる防災講座を開催しました。この講座は毎年行っているため、高学年ともなれば、以前に教えてもらったことをよく覚えているものです。講座開催の成果は確実に出ていると言えます。いざという時に命を守るためには･･･ご家庭でも話し合ってくださいというのが、原さんの結びの言葉でした。大切な命を守るため、防災についてご家庭でもぜひ話題にしていただけるとよいかと思われます。

“本来の掃除”再開･･･そこから感じたこと。

12/2 付の「ほけんだより１２月号」（ホームページにも載せてあります）でお伝えした通り、１２月からは“本来の掃除”を再開しました。これまではコロナ感染防止の観点から簡易的な掃除で済ませていたのですが、再開は、「掃除もまた、子どもたちにとっての学習である」という観点からの判断です。

“本来の掃除”を再開したことで、色々と発見がありました。ある子は「雑巾をしぼる」という行為を初めて体験しました。最初はしぼり方が分からなかったため、担任に教えられ、見よう見まねでしぼり、その子は成功体験を得ました。これまで感染予防のために雑巾を使わせていませんでしたので、雑巾のしぼり方が分からなくても当然と言えば当然なのです。また、ある子は雑巾がけの姿勢が保持できず、途中でひざから崩れ落ちること数回、四苦八苦していました。でも、その子は楽しそうに雑巾がけを続けました。雑巾がけを通じて、きっとその子の体力も向上することでしょう。

子どもたちは“本来の掃除”に熱心に取り組めています。床を拭いて真っ黒になった雑巾を見、満足そうにする子が多くいます。きっと、手間がかかる分だけ達成感や満足感も大きいのでしょう。旧態依然としていても、“本来の掃除”は子どもたちにとって必要な学びなのです。

世の中は常に能率化、効率化、簡略化を求めます。それもすごく大事なことですね。ただ、“本来の掃除”のような手間のかかる活動の中にも、教育は確かに存在します。『温故知新』の大切さは、こんなところにあるのかも知れません。学校での活動は、すべてが子どもに還元されるべき教育活動となります。子どもたちの健全育成に向け、学びの一環としての掃除を、今後も大切にしたいと考えています。